

平成 22 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19530439  
 研究課題名（和文） 国際結婚と「東アジア共同体」：日本人－タイ人の結婚を中心として  
 研究課題名（英文） Cross-cultural Marriage and ‘East Asian Community’：mainly on Japanese-Thai Marriage  
 研究代表者  
 藤井 勝（FUJII MASARU）  
 神戸大学・大学院人文学研究科・教授  
 研究者番号：20165343

研究成果の概要（和文）：東アジアにおける国際結婚は、「東アジア共同体」の構築を社会的に支える重要な要素となる。しかし現状では、この国際結婚は人権侵害、離婚、暴力など、さまざまな問題点を内包している。本研究は、日本人－タイ人の国際結婚を事例としながら調査研究を行うことによって、この国際結婚の多様な展開の姿を類型論にもとづいて明らかにすると共に、それぞれの類型（あるいは形態）における結婚、家族、地域社会などめぐる特質や問題点を解明した。これによって、今後の国際結婚の発展に資する研究成果を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：Cross-cultural marriage in East Asia is to become an important element supporting the creation of ‘East Asian Community’ socially. However, at the present this cross-cultural marriage includes a lot of problems: violation of human rights, divorce, violence and so on. This research, which has mainly focused on Japanese-Thai marriage as a case of East Asian cross-cultural marriage, has investigated into its diverse development based on a typology, and clarified characteristics and problems of each type and form in terms of marriage, family, community, etc. As the results, this research has obtained fruitful outcomes to contribute to the development of cross-cultural marriage in East Asia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：国際結婚、家族、国際化、地域社会、社会開発、東アジア

## 1. 研究開始当初の背景

（1）研究代表者が行ってきたタイ、とくに東北タイの家族や地域社会の研究を通じて、日本人－タイ人の結婚を直接に観察してき

たことである。またチュラーロンコーン大学シリラット・エートサクン助教授より、パンラーヤン・ファラン（欧米人と結婚するタイ女

性)の実態、またにパンラヤー・イーブン(日本人と結婚するタイ女性)の情報を得て、このテーマの重要性を認識するに至った。

(2) この結婚は、従来の国際結婚論の枠組みを超えていると考えたからである。東アジアに関する従来の国際結婚論は社会問題的側面(人身売買、夫婦関係の問題)に注目するが、研究代表者が得た知見からは、この国際結婚は矛盾や問題を内包しつつも社会的意義をもち、その重要性は今後強まると考えられた。たとえば、外国人妻を迎える夫側は、日本の地域社会で家族生活を世代的に維持することが可能になる。つまり、この国際結婚の社会的意義をプラスとマイナスの両面から正確に捉えながら解明する必要がある。

(3) 日本人とタイ人の結婚に対する学術的関心が薄いことである。フィリピン人・中国人との国際結婚は日本の学術・マスコミ分野で一定の関心を集めているだけである。タイでも、パンラヤー・イーブンの研究はまだ俎上に上がっていない。しかしながら、日本人-タイ人の結婚ではタイで家族生活を営む場合が相当数あるなど、日本人と様相がみられ、そこに現代性・先進性が示唆されている。

## 2. 研究の目的

(1) 国際結婚はグローバル化の重要な指標である。国際結婚は、国境を越えた人と文化の移動をもたらし、新しい社会と文化の創造に貢献する。とくに、東アジア(東北アジアと東南アジアからなる)で増加している東アジア圏出身の男女間の国際結婚は、「東アジア共同体」の形成という展望にとって重要な意味をもつ。現状では、さまざまな社会問題を内包しているものの、この国際結婚が将来重要を増すことは否定できない。したがって、この視点からこの国際結婚を正当に位置づ

けながら、実態や問題点を解明することを目的となっている。

(2) 以上の目的を前提としながら、本研究は、とくに日本人-タイ人の国際結婚を明らかにし、さらに韓国等における展開と比較し、最終的には東アジアの国際結婚の方向性を示すことを目的としている。東アジアのすべての国(地域)間における国際結婚の研究することが最終的には必要があるので、本研究をそのための出発であると位置づけている。

## 3. 研究の方法

(1) 以上のような目的を達成するために、次の点を重視ながら研究を実施した。a)タイ女性の日本人との結婚が女性の出身の家族や地域社会(タイ国内)にもたらす効果・影響。b)タイ人女性を受け入れた日本の家族や地域社会にもたらされる果や影響。c)タイで生活する日本人-タイ人夫婦における家族や地域社会をめぐる特徴と、日本で生活する日本人-タイ人夫婦との比較。d)日本人-タイ人の結婚の中から生じる新しい社会的文化的要素。e)日本人-タイ人の国際結婚の特徴と韓国等における国際結婚の比較。

(2) そのための調査等を、以下のように実施した。

①日本の大都市部および地方・農村部での日本人-タイ人の結婚の調査研究。大都市部は関西圏と東京圏で、地方・農村部は長野県佐久地域で実施した。とくに後者を選んだ理由は、この地域はタイ人が多数住む地方の代表であり、しかも研究代表者はこの地域で農村調査に従事した経験があるからである。これらの調査は、聞き取り(大都市部および地方・農村部でそれぞれ10事例程度)と資料収集が中心となった。その他、在日タイ大使館領事部でも聞き取り調査を実施した。

b)タイ東北部での国際結婚の現地調査。研

究代表者はコーンケン県やマハーサーラカム県で数年来地域調査に従事してきたので、その経験を生かしてコーンケンおよび近隣県で日本人と結婚したタイ人女性の実家等の聞き取りを約 15 例程度実施した（女性が帰省中の場合は、女性本人にも聞き取りを実施）。またタイ人女性の国際結婚の全体像や特質を解明するため、コーンケン大学メコン圏プルーラリティ研究センターの協力を得て、2008 年 12 月に研究セミナー「Cross-cultural Marriage of Thai Women」（コーンケン大学）を実施した。

c) タイのバンコクにおける日本人－タイ人の国際結婚調査。ここでは聞き取りと質問紙調査を併用し、質問紙調査はバンコクの日系幼稚園・保育園 3 カ所の協力のもとで 2009 年 9 月に実施し、70 ケース程度を調査できた。

d) 比較のための調査。韓国忠清南道の農村部で、韓国人男性－東アジア圏出身女性（ベトナム人、中国人など）の国際結婚に関する聞き取り等を、現地研究者の協力を得て実施した。また、日本人－タイ人の国際結婚を東アジア圏内の国際結婚と比較・検討するために、専門家を招聘し、2009 年 12 月にワークショップ「Cross-cultural Marriage in East Asia」（神戸大学）を開催した。

#### 4. 研究成果

(1) 本研究を通じて、東アジアの国際結婚の社会的意義がより明確になった。C. レヴィ＝ストロースの『親族の基本構造』に従えば、結婚とは異なった集団や社会の間での女性の交換であり、そのために結婚は「外婚」となる。この「外婚」によって異なった集団や社会の繋がりが維持され、文化の交流や普及が進行する。グローバル化する現代では、国を超えた人々の繋がりが重視されるから、国際結婚は現代にマッチした「結婚」、つまり「外婚」の姿であろう。現状で

は数々の問題が内包されているが、この国際結婚の「先進性」を否定することはできない。

加えて、今日では「東アジア共同体」の構築が模索され、日本の政界、経済界さらに学界ではとくにその期待が大きい。この共同体を構築するためには東アジア圏内の国、地域、集団の繋がりの強化が必要だが、東アジア内で進行する国際結婚は、「外婚」の論理にもとづいて、それを牽引することができる。この国際結婚は「東アジア共同体」の構築を社会的文化的側面から担っている。

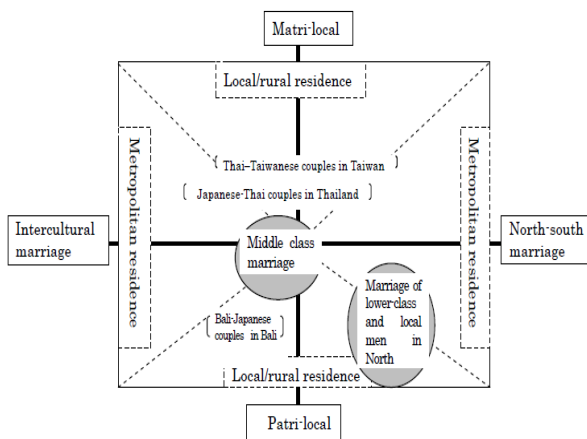
(2) 以上の認識にもとづいて調査研究を行い、グローバル時代における国際結婚の分析枠組みを提示することができた。

C. レヴィ＝ストロースの「女性の交換」論を現代の国際結婚の「外婚」に単純に適用できない。現代の婚姻には社会や集団の間の厳密な相互的あるいは循環的なシステムを捉えにくいからである。この点を前提としつつ東アジア内部の国際結婚をみると、経済発展の「遅れた国」から「進んだ国」へという女性の移動（「外婚」による移動）が基調となる「南北間型国際結婚」（the type of North-south marriage）と、先端的な人の移動と交流（ビジネス、留学、ツーリズムなど）を契機とする中間層主体の「文化交流型国際結婚」（the type of Intercultural marriage）が存在する。

国際結婚の専門家である嘉本伊都子は、国際結婚を女性の上昇婚という視点から捉えているが、東アジアの「南北間型国際結婚」では、女性個人の豊かな生活への志向だけでなく、女性（妻）の「親族（とくに近親）援助」や「故郷支援」の志向が顕著である。一方、東アジアの国々では様々なかたちで「中間層」化が進展し、それは「南北間型国際結婚」とは違った形での「外婚」、つまり「文

化交流型国際結婚」を創出している。この結婚は高等教育を受けた人々の中の結婚であり、「中間層」内婚という点で「外婚」的特質は弱まるが、結婚は異文化・社会を「意識化」させ、それだけ異なる国・地域・集団の繋がりを強める機能をもつ。

この二つのタイプの設定の上に、a) 家族社会学的視点による夫方・妻方の婚姻形態、および b) 地域社会学的視点からの都市・農村（地方）の生活形態を加えて、以下のような分析枠組みを設定できる。



a) や b) を設けたのは、これらが国際結婚の特質に影響するからである。たとえば、「南北型国際結婚」は、女性の移動を伴う場合は「夫方居住 (Patri-local)」になるが、日本人-タイ人の結婚では、夫 (日本人) が妻の国 (タイ) に移動する「妻方居住 (Matri-local)」も存在する。しかもバンコクで生活する「大都市 (圏) 居住 (Metropolitan Residence)」と地方都市や農村部で生活する「地方/農村居住 (Local/rural Residence)」がある。地方/農村部に居住する場合は、職業だけでなく、家族生活そして親族・地域社会との関係において独自の特質が生まれる。

(3) 本研究で行った日本人-タイ人の結婚に関する調査研究を、この分析枠組みから検

討し、多くのことが明らかになった。

① 国際結婚の数は、「南北型国際結婚」が「文化交流型国際結婚」に優位しているが、日本社会におけるタイ文化への関心の強さを背景として、若い世代では「文化交流型国際結婚」が増加する傾向にある。日本とタイの間の国際結婚は両タイプの国際結婚の複合であり、同じ東南アジアのフィリピン人との結婚、また日本人と中国人・韓国人との国際結婚とも性質が異なる。

② 「南北型国際結婚」では、日本人男性とタイ人女性が結婚し、「夫方居住」するのが多数派である。日本の大都市居住と地方/農村居住の割合を統計的に示すこと難しいが、東北タイ農村部で調査した結果では大都市に住む割合が高い。しかしながら大都市での生活は生計が不安定になりがちで、その結果、妻 (タイ人) 側の結婚目的である「親族援助」が円滑に行われにくいという問題点も生じている。日本の大都市で生活する「南北型国際結婚」は、好条件 (夫が経営する飲食店等が順調であるなど) がない限り安定しにくい。

これに対して、地方/農村部で生活する場合は、日本特有の文化のなかで妻 (タイ人) が適応できにくいなどの問題があるものの、極度の経済的困窮に遭遇する可能性は相対的に低い。このため実家への送金なども比較的維持可能である。また、女性 (タイ人) のほとんどは地方/農村部出身なので、日本の地方/農村部にも適応しやすい。日本社会側からみれば、子孫を生むことを通じて地域社会の再生産に貢献している。

加えて、タイ人妻による親族の経済援助は、近親者にとって重要であるが、全てではないことも明らかになった。従来の研究等では、この親族援助の側面が非常に強調されてきたが、実際には、結婚当初に経済的な動機や関心が優位するにしても、子供の誕生や成長

を契機として近親者の関心は多様なものになる。その意味で、このタイプの国際結婚にも、異なる社会や集団を結びつけ連帯させる結婚＝外婚の論理が十分に内在している。

③「南北型国際結婚」には、「妻方居住」が一定数存在することも重要である。このタイプは、日本－タイの経済関係を抜きには考えられない。つまりタイでは日系企業等が多数活動し（観光業を含めて）、この経済環境に直接・間接にかかわる日本人向けの雇用やビジネスが豊富に存在している。本研究では、バンコクの幼稚園・保育所を対象とした調査のなかの一部にこの国際結婚がみられた。

この結婚におけるタイ人妻の生活は、日本の大都市で生活する「南北型国際結婚」のタイ人妻よりは安定的である。しかも比較的安定した地位を獲得することにより、「専業主婦」化する傾向さえみられる。同時に、自身の出身社会（タイ）に住みながらも、夫の人間関係（夫の会社など）を重視する生活スタイルが生じたり、母子間での使用言語が、相対的に日本語中心になったりする傾向がある。この国際結婚はタイに生活拠点をもちながら、予想以上に「日本」側に置かれている。

タイで増加しているパンラヤー・ファランの一部は「妻方居住」をとって、妻の出身地である東北タイの地方/農村に家（しばしば大家屋を新築）を構えている。これら欧米人夫には年金生活者が多く、子供を設けず、もっぱら自分の晩年を楽しむ傾向が強いが、日本人夫の多くは、個々にみれば問題を抱えているものの、むしろ結婚と家庭の実質を有しているように思われる。

④「文化交流型国際結婚」も、日本人夫－タイ人妻のカップルが主流であり、しかも多くは「夫方居住」の形態をとる。つまり、中間層を中心とする国際結婚も、東アジア社会の父系主義的あるいはジェンダー的編成に

影響されている。加えて、日本とタイは「南北」関係の側面をある程度内包しているから、「南北型国際結婚」に典型的な「妻の親族援助」は相対的に弱くなるものの、女性はより豊かな生活を求めて日本に移動する。

この国際結婚は中間層文化の普遍的な性格を基盤にして成り立ち、経済的にも相対的に安定しているが、タイ人妻の心理的ストレスは「南北型国際結婚」とは違ったかたちで存在している。タイ社会は女性の職場進出が著しいので、中間層である彼女らは母国で職業的なキャリアを有している（あるいはその立場にある）が、日本に移住すると母国で期待できる職業上のキャリアを実現できない。「専業主婦」化せざるを得ず、そのことがストレスを生み出す。このタイプの国際結婚では経済的リスクは相対的に低い、社会的心理的なリスクがあることになる。また大都市（圏）の希薄な人間関係は、そのリスクを一層高める可能性がある。

⑤一方、タイで生活する「文化交流型国際結婚」の主流は、日本人が夫である「妻方居住」婚であり、多くはバンコク圏に住む。この存在を支えるのは、主要には、すでに述べたタイにおける日系企業等が作り出す経済環境である。しかし、このタイプの国際結婚では、妻はタイでの職業キャリアを維持・向上させつつ結婚生活を送ることができるので、家族生活が「日本＝夫」中心に営まれるという傾向は弱く、対等な関係での「文化交流」が国際結婚のなかで実現されている。そのため、この夫婦のなかで生まれる子供たちは東アジアの新時代を切り開く人材としてとくに有望であろう。

また「夫方居住」、つまりタイ人夫－日本人妻のケースも一定の割合で存在している。このタイプは古くより存在してきたため、決して新奇ではないが、タイにおける中間層の

拡大を反映して、今後さらに増加するであろう。やはりバンコク圏に住み、タイ人夫が安定した社会的地位をもっているので結婚生活は経済的には安定している。ただし、タイでは「専業主婦」的生活は一般的でないから、日本人妻達は長期的には何らかの職業的キャリアーの形成が周囲から期待される。

(3) 本研究では、韓国や台湾における国際結婚の現状や特質、さらに日本におけるタイ人以外との国際結婚についても調査や資料収集を行い、日本人-タイ人の結婚のもつ特徴が明らかになった。

①東アジアの国際結婚は、従来「南北型国際結婚」、とくに女性が夫側に移動する「外婚」が注目されてきた。韓国では、政府が、この国際結婚によって生じた家族を「多文化家族」と規定し、支援策を実施している。これに対して、日本では自治体レベルの交流や生活支援策はあるが、全体的な政策がなく、その結果、日本人-タイ人に限らず日本における国際結婚は社会的な認知、それにもとづく社会的受容が十分ではない。

②日本人-タイ人の国際結婚は、すでに見たように、多様なタイプを内包している点で興味深い。韓国や台湾ではこの多様性は弱いとされる。男性が結婚して東アジアの他の国で住むというのは極めて異例であるようだ。日本人-タイ人の結婚に見られる多様性は、タイにおける日本の経済力という特別な側面によって支えられているのは事実だが、この多様性の展開自身は、東アジアの国際結婚の発展の方向を先駆的に示であろう。したがって同時に、日本人-タイ人の国際結婚のそれぞれのタイプに内包されている問題点の検討は、今後の東アジアにおける国際結婚の発展にも資するものと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- ①Yenjit Thinkham, 「タイ女性と日本人男性との国際結婚」(タイ語)、Journal of Ubon Ratchathani University, No. 11-4, 2009, pp. 67-79. 査読(有)
- ②シリラット・エートサクン、「ウドンターニー県における農村女性の国際結婚」、『社会学雑誌』、26号、2009年、pp. 74-91. 査読(無)

〔学会発表〕(計3件)

- ① Yenjit Thinkham, “Transnational Relation of Cross-cultural Marriage between Thai Women and Japanese Men”, The 2<sup>nd</sup> Annual International Conference on Social Sciences and Humanities, 2010年4月2日, Royal Riverside Hotel, Bangkok.
- ②藤井勝「東北タイ農村と国際結婚：日本人男性との結婚を中心として」日本タイ学会第10回大会(一橋大学)、2008年7月5日
- ③藤井勝「近隣国からの越境労働力と地域社会」日本タイ学会第9回大会(北海道大学) 2007年7月8日

〔図書〕(計2件)

- ① Masaru Fujii ed., *Cross-cultural Marriage in East Asia: Japanese-Thai Marriage and its Comparison*, Kobe University, 2010, pp. 1-156.
- ②Maniemai Thonyou and Masaru Fujii eds, *Seminar on Cross-cultural Marriage of Thai Women*, Kobe University and Khon Kaen University, 2009, pp. 1-105.

〔その他〕

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/sociology/fujii/cross-cultural.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

藤井 勝 (FUJII MASARU)  
神戸大学・大学院人文学研究科・教授  
研究者番号：20165343

### (2) 研究分担者 なし

### (3) 連携研究者

平井 晶子 (HIRAI SHIKO)  
神戸大学・大学院人文学研究科・准教授  
研究者番号：30464259

### (4) 主な研究協力者

ADSAKUL, SIRIRATH  
チュラーロンコーン大学・政治学部・助教授  
THINKHAM, YENJIT  
コーンケン大学・人文社会学部・大学院生  
奥井 亜紗子  
日本学術振興会特別研究員